

「**やられてもやり返さない**」 ヤコブの手紙1：1～18

## I 導入部

おはようございます。9月の第一日曜日を迎えました。残暑厳しい日が続いておりますが、今日も会堂に集い、あるいは、ライブ礼拝を通して家庭での礼拝と、共に心を合わせ、心を一つにして、心から礼拝をささげることができますことを感謝致します。

9月に入り、8月には朝早くから鳴いていた蟬の声もあまり聞かなくなったような気がします。沖縄や九州地区では台風の影響で被害が出ています。神様のお守りとお支えがありますようにお祈り致します。まだ、残暑厳しいですが、秋の気配を感じるようにも思います。

さて、今日はヤコブの手紙1章1節から18節を通して、「**やられてもやり返さない**」という題でお話し致します。

今、日曜日の夜のドラマで、「**やられたらやり返す。倍返しだ。**」というフレーズで大変有名になり、視聴率もドラマの中ではトップで、特にサラリーマンの方々は、ご苦労があるのでしょう。このドラマを見て、すっきりして、力を得て月曜日の仕事につくようです。

やられたらやり返す、それが、私たち人間の思いや感情でしょう。しかし、聖書は、私たちに違う角度から語るのです。

## II 本論部

### 一、僕として生きる

ヤコブの手紙は、ヤコブという人物が、離散している十二部族（イスラエル以外にいるユダヤ人、リビングバベルには、国外にいるユダヤ人クリスチャン）に対して書いた手紙です。このヤコブという人は、イエス様の兄弟のヤコブです。1節には、自分のことを「**神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ**」とあります。ヤコブはイエス様の兄弟なのでから「**主イエス・キリストの兄弟ヤコブ**」とした方が、離散しているクリスチャンユダヤ人に対しては、影響力がある。信頼性がある。イエス様の兄弟だということでインパクトがあり、手紙の内容を真剣に受け止めてくれるように思いますが、彼は、「**神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ**」と自分を紹介するのです。

ヤコブはイエス様の兄弟ですから、子どもの頃からイエス様と共に育ちました。大工の子どもとして、大家族の中で貧しい生活だったと思います。父ヨセフは早くに死んで、イエス様は長男として大工の仕事を引き継いでいたでしょう。イエス様が家族を養っていたともいえる。そのイエス様が30歳になると、大工の仕事をやめて、神の国について語り、弟子をつくり、従え、教祖として歩み始めた。当然、弟たちにしわ寄せがきて、弟のヤコブも仕事をしたのかも知れません。兄イエスのせいで、自分に迷惑がかかったとイエス様を恨んでいたのかも知れない。ヤコブは、イエス様を救い主として、神様から遣わされたお方として信じることはできなかったのです。福音書には、母マリアや兄弟たちがイエス様を連れ戻しに来たような記事もあります（マルコ3:31-34）。

ヤコブは、イエス様を救い主と信じませんでした。しかし、復活されたイエス様に出会い、十字架と復活を信じて救われました。そして、彼は、使徒言行録1章にある二回座敷に集まり、祈りをささげた120名の中にいたようです。ペンテコステ、聖霊の経験をし、初代教会の誕生をも経験して、初代教会の代表者の1人として彼は立てられ用いられてきました。

そのように神様にも用いられたヤコブは、自分を紹介するのに「主イエス・キリストの兄弟ヤコブ」と紹介するのではなく、「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」と紹介しました。救い主イエス様の兄弟と言うある意味では、力ともなり、榮譽ともなるその関係を用いて何かをするように、権力や肩書を用いるのではなくて、あくまでも自分は、「神と主イエス・キリストの僕であるヤコブ」、神と主イエスの奴隷として神に仕えている者であることを、謙遜をもって、離散している十二部族に紹介したのです。私たちにもいろいろな肩書や関係があるでしょう。それを使っても、用いても別に問題はありません。しかし、私たちもヤコブのように、キリストの僕として、神様に仕える者として、人々に仕える者として歩みたいと思うのです。

## 二、神様の助けが必ずあると信じ続ける忍耐

離散している人々ですから、イスラエルにいるユダヤ人よりも、苦労や苦しみが多くあったことだと思います。並大抵な試練や困難ではなかったことでしょう。そのような人々に対してヤコブは、2節で「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。」と語るのです。新改訳聖書には、「私の兄弟たち。様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。」試練を「いつでも」喜ぶようにとあります。

口語訳聖書では、「わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい。」とあります。試練を「むしろ非常に」喜ばしいことと思いなさい、と言うのです。

手紙を書きだすのに、自分の紹介の後に、「試練を喜べ」といきなり書く人はいるでしょうか。パウロは多くの手紙を書きましたが、出だしは、神様に対する感謝や、相手に対する賞賛や祈りについて書いています。最初から「試練を喜べ」とは書きません。普通は書かない事です。

私たちは、自筆で手紙を書くということは、少なくなったことでしょう。メールや携帯での機械的な文字ではあっても、やはり、お元気ですか。主の祝福を祈りますとか、まず書くでしょう。試練をこの上ない喜びとしなさい、と書いて送れば、二度と返事はかえってこないかも知れません。

ヤコブは、「試練」というものを、ただいやなもの、苦しいもの、避けて通りたいものという考え方ではなく、3節には、「信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。」「リビングバイブル 行く道が険しければ、それは忍耐を養う良いチャンスとなるからです。」とあり、4節には、「あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全で申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」「リビングバイブル 忍耐力を十分に養いなさい。さまざまな問題が持ち上がった時、そこから逃げ出そうともがいてはいけません。忍耐力が十分身につけば、完全に成長した、どんなことにもびくともしない、強い人にな

れるでしょう。」と、試練を前向きなもの、意味あるもの、私たちが成長、成熟させるものだということです。

私たちは、苦しみや痛みを通して忍耐が与えられるということです。パウロは、ローマの信徒への手紙5章3節から5節で、「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということ。希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」と語っています。苦難は希望につながると言いました。ヤコブもパウロも苦難が忍耐を生むと言っているのです。

ヤコブやパウロのいう「**忍耐**」とは、ただ我慢してひたすら待つ、というような消極的なものではなく、神様は必ず助けて下さる、必ず導いて下さる、最善にして下さると信じ続ける忍耐なのです。神様が共におられるならば、なぜこのようなことが起こるのかとか、祈っても何も答えられないという状況の時、神様を疑いたくなりますが、疑うことなく、信じ続けていく忍耐なのです。それが5節から8節に記されていると思います。

私たちの信仰生活においても、神様を信じる私たちも、神様を、神様の存在を、神様の全能を疑いたくなるような出来事を経験します。しかし、神様を神様として、何でもできる全能なるお方として、信じ続ける忍耐が必要だと聖書は今日、私たちに語るのです。

### 三、イエス様も忍耐された

12節には、「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。」とあります。ここでも、試練に耐え忍ぶという忍耐について語ります。

旧約聖書において、試練と言えばヨブでしょう。多くの子どもが与えられ、たくさんの家畜や財産が与えられ、「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きていた。」(ヨブ記1:1)と聖書はヨブを語ります。そのヨブが、子どもたちを失い、家畜の全てを失っただけではなく、全身ひどい皮膚病になって苦しむのです。なぜ、自分が苦しむのか理解できない。苦しみの理由がわからないことこそ苦しいものではありません。自分の犯した罪で苦しむこと、自分の失敗のゆえに苦しむならば、まだ納得がいきます。しかし、ヨブは自分には落ち度はない。問題はないと神様に主張します。そして、神様が自分の訴えに答えて下さらないという苦難に遭遇します。そして、神様が答えて下さらない代わりに、ヨブの3人の友人が彼を慰めようと来るのですが、ヨブのあまりにもひどい状況に、このような苦難はヨブに罪があるから、彼が何か隠れた罪があるからに違いないと判断し、ヨブに悔い改めるようにと迫り、彼を責め続けます。しかし、ヨブは自分の正しさを、潔白を主張するので。

最後には、神様がヨブに答え、ヨブは神様の事を耳で聞いていたけれども、今、この目であなたを仰ぎます、と悔い改めるのです。そして、ヨブの友人がヨブのため祈った時、神様はヨブの境遇を元に戻し、財産を2倍にして下さったのです。神様は、最初サタンとの会話で、ヨブに対して、「地上に彼ほどの者はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」(ヨブ記1:8)と語り、サタンは神様がヨブを祝福しているので、神様を信じているから、財産を取ったら、体に痛みを与えたら、つまり、苦難を与えたら神様を呪うはずだ、という言葉に対して、神様がヨブの財産を失わせること、体を打つこ

とを許されたことが始まりでした。ですから、ヨブの信仰深いこと、神様を恐れて生きているということが苦難の始まりでした。

ヨブは財産が失われ、子どもたちが死んだこと、体全体が病で苦しむという辛い経験をしました。その上に、彼の友人がヨブを罪ありと徹底的に責める言葉と態度に苦しみました。

ヤコブはヨブについて次のように語ります。「忍耐した人たちは幸せだと、わたしたちは思います。あなたがたは、ヨブの忍耐について聞き、主が最後にどのようにしてくださったかを知っています。主は慈しみ深く、憐れみに満ちた方だからです。」(ヤコブの手紙 5:11)

そして、誰よりも主イエス・キリスト様は、私たちのために忍耐の限りを尽くして下さいました。罪のないお方が、私たちの罪のために、罪ありとされ、私たちの罪を罪のないイエス様が全てを負って下さり、私たち罪ある者が裁かれなければならないのに、イエス様が十字架の上に裁かれ、私たちの血が流される代わりに、イエス様の血が流され、私たちが罪のゆえに死ぬべきなのに、罪のないイエス様が尊い命をささげ死んで下さったのです。イエス様が死んで葬られ、よみがえることによって、私たちの全ての罪が赦され、清められ、魂が救われ、死んでも生きる命、永遠の命、復活の望みが与えられたのです。

### Ⅲ 結論部

ヤコブはイエス様の弟でした。なかなかイエス様を救い主と信じませんでした。復活されたイエス様に出会い、イエス様を信じました。ヤコブは、生前イエス様が語っておられた言葉を弟子たちに聞いたのかも知れません。イエス様は、「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。

喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」(マタイ 5:11-12) と言われたことがありました。

ヤコブが手紙を書いている離散しているユダヤ人クリスチャンたちは、迫害にあつてイスラエルを後にした人々でしょう。そのような彼らを励ましたい。その苦しみを共に負いたい。慰めの言葉で支えたい。しかし、ヤコブは自分の兄であった、救い主であったイエス様がかつて語ったであろう「わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。喜びなさい。大いに喜びなさい。」という言葉を受けて、イエス様を信じて信仰を持ったヤコブ自身が、離散したユダヤ人たちに、「わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。」「試練を耐え忍ぶ人は幸いです。」とイエス様の思いを胸に語ったように思えるのです。

私たちの信仰生活も、苦難があります。試練があります。しかし、苦難や試練は私たちに強め、信仰が試されることで忍耐が与えられる。どのような事を経験しようとも、必ずイエス様は共におられ、私たちを守り助けて下さる。状況がよくならなくても、必ず解決して下さい。祝福して下さい。すでに私たちの罪を赦すために、神の子である、罪のないお方が私たちに代わり裁かれ、命をささげて下さった。そのような愛を私たちは受けているのですから、イエス様を守り支え、助けて下さることを信じ続ける忍耐を与えられて、イエス様に信頼して、期待して、歩みたいと思います。やられたらやり返すという負の連

鎖ではなく、やられてもやり返さないという神様の愛に触れて、この週も歩んでまいりましょう。